

【問題】

次頁以下に掲げる文章は、広田照幸氏による「学校の役割を再考する―職業教育主義を超えて―」（神野直彦・宮本太郎編『自壊社会からの脱却―もう一つの日本への構想』（岩波書店、二〇一一年）の第六章）と題する論説である。

この文章を読み、以下の問いに答えなさい。

問一 筆者が述べる「職業教育主義」とはどのようなものを説明しながら、文章全体を、答案紙の行数にして三〇～四〇行程度で要約しなさい。

問二 筆者は「職業教育主義」の「限界」と「問題点」を区別している。なぜ筆者が「限界」と「問題点」とを区別して論じているのか、答案紙の行数にして五～一〇行程度で説明しなさい。

問三 筆者が指摘する「教育機関が職業準備に専念する社会は、民主主義も市民社会も空洞化を免れない」（傍線①）とは具体的にどのようなことか、答案紙の行数にして五～一〇行程度で説明しなさい。

問四 筆者が指摘する「未来の『よい仕事』を強力な学習動機にしてきた戦前以来の受験生文化が、自家中毒を起こす事態になっているといえる」（傍線②）とはどのような意味か、答案紙の行数にして五～一〇行程度で説明しなさい。

〔参照〕 自家中毒症：自己の体内で生じた有毒物質によって起こる中毒症。

『広辞苑（第六版）』より抜粋